

SDGsを探究する総合的学習と修学旅行指導への反映

—熊本市立北部中学校の取り組みを事例として—

General Learning to Research SDGs and Reflection to School Excursion:
Case Study of the Approach of Kumamoto Municipal North Junior High School

寺本 潔

Kiyoshi Teramoto

I はじめに：問題の背景

「私は、北部らしさのある『つながり続ける』ことが良いと今回の研修で考えた。北部中は、熊本市と多くの取組をしているので、企業が加われば『学校・市や県・企業』が連携した他にはない活動ができるのではないだろうか。ラウンドテーブルでは、SDGsに比べ、NIEを取り入れている学校は少なかった。だから教育面では、NIEに実践的な本校が新聞社と国内外の学校や公共施設との橋渡し役を担い、つながるきっかけを作れる。また、課題を抱える施設や企業の要望に応えるため、熊本の自然の良さを活かした熊本観光プランを観光会社に提案するのもいいと思う。このように、時代で変化する地域の課題に北部の良さを活かして取組むことで、つながり続けることができる。私はこの新たなつながりをここ北部から発信し、広めたい。」(熊本市立北部中学校生徒 田尻葉優子さん) この作文は、福井大学で開催されたラウンドテーブル2019に北部中学生会代表で出席した中学生が綴った作文である。実社会の各セクター同士が「つながり続ける」ことの大切さについて、主張できている。当中学校のSDGs学習の関心度の高さが伝わってくる。

学校教育において「総合的な学習の時間」(以下、総合と略)が果たす役割は、改訂された学習指導要領においても大きな比重を占めてくることが予想される。「何を知っているか」という学習内容(コンテンツベース)習得に重きをおいた教育から、「何ができるか」という「生きて働く学力」が身につく実社会と自分とのつながりを強化した学び(コンピテンシーベース)に転換するよう求められているからだ。問題の背景として、これまでの中学校における総合は、ともすれば教科の補修時間に組み替えられたり、修学旅行での注意確認や旅のしおりづくり、個別進学指導の時間に費やされていたりするなど、本来の総合の趣旨に見合わない使い方が一部になされていた。これからは、教科で学んだ知識や技能、思考力等を総合で応用し、明確な課題解決の学習スタイルに転換しなければならない。修学旅行も事前・事中・事後の指導を計画的に設定し、生徒自身の課題を探究する時間にかえていく必要に迫られている。

本稿で紹介する熊本県熊本市立北部中学校の事例では、中学校総合の運営の基軸にSDGs(国連持続可能な開発目標)が取り入れられ、積極的に総合の学習改善や修学旅行の変革に取り組む姿が伝わってくる。熊本市が令和元年度にSDGs未来都市に内閣府より選定されたことで市内の小中高校での取り組みが加速しつつある。このたび、筆者が熊本市出身である縁もあり、北部中学校に向いて生徒や教職員への講演・指導に当たるきっかけを得た。本稿はその時の解説資料を下敷きに当中学校からの聞き取りを元に執筆したものである。

II SDGsを取り込む北部中学校の総合的学習

SDGsを論議する前に我が国では、ESD（持続可能な開発のための教育）が長年、推進され、今次改訂された学習指導要領においても総則に「持続可能な社会の担い手」づくりが強調されるなど、一定の成果が教育課程に盛り込まれている。北部中学校では、身につけたい7つの力として「思考力」のジャンルに「①批判的思考力②多面的・総合的思考力③キャリアプランニング力」、「姿勢・態度」に「④コミュニケーション力⑤情報活用力⑥レジリエンス（柔軟性）⑦シチズンシップ（市民性）」が明確化されている。これらの力が北部中学校で自觉されていることに着目したい。

一方で、学力面を支える令和2年度の総合の全体計画は表1に見られるように構想されている。

「つながる」をキーワードによりよく生きること、よりよい世界をつくるために自分たちがどのように関わるのかが随所に綴られている。

さらに、学校紹介のパンフレットを紹介したい（資料1参照）。1年総合は、「楽しいメッセージ+SDGs文字に未来への思いを込めて」が強調され、「作品をつくり発信する活動を通して社会や学んだことなど多様なことと、つながることを意識して学習活動に取り組んでいます。」と解説されている。学習の流れでは、①SDGsについて知る②SDGsの17項目の中から、興味ある分野を選ぶ③思いを言葉で表現する（どんな未来にしたいのか、そのために何ができるか）④文字のデザイン⑤発表原稿づくり⑥プレゼン、という流れで展開するという。

2年総合では、「仕事で見つけたSDGs」と題され、1年生の3学期に職業講話を様々な方々から受けたことを下敷きに仕事の中に「見つけたSDGs」と題する気づきを設定している。ポリテクセンター熊本やリストランテミヤモト、ジェットロ熊本といった会社の関係者からの講話を元に、身近な地域で生徒自身が見つけたSDGsでは、消防署（命を助ける仕事）や森林管理局（樹木の育成を通して陸の豊かさを守る）、電機工業株式会社（古い機械や物のリサイクルから造る責任、つかう責任のSDGs）を見出し探究している。

3年総合では、「これからの未来を生きるわたしたち」と題して、キャリアパスポートを意識した設定になっている。世界の課題を地域の課題につなげる視点が進路に考慮されている。北部中学校ではITEタブレットを用いて情報を収集・分析しながら話し合い活動を展開している。また、生徒で組織された学習向上委員会では、アプリの使い方を学んだ生徒が全校生徒に教えるといったApple Timeという活動を実施している。さらに、NIE委員会では、新聞活用を通してSDGsの課題意識を醸成し、地域に貢献する人材に成長するにはどうしたらよいかを考え合う機会としている。

III 熊本市の地理歴史的特性とSDGs学習

熊本県は、九州の中央に位置し、比較的温暖で降水量も多いため緑が濃く、水道水の源である地下水起源の湧水に恵まれている。県の中心都市である熊本市（人口約73万人）は、加藤清正と細川家による統治を経て城を起点にした城下町起源の美しい政令指定都市である。福岡・北九州市と並ぶ経済圏を有し、食べ物や伝統工芸、祭り、方言の魅力にも富んでいる。県南には公害を克服してきた環境都市、水俣市もあり、二つの国立公園として活火山のある阿蘇山と潜伏キリシタン遺産を持つ多島海・天草エリアに挟まり、新幹線も停まる九州観光のハブ（中継地）としての利点に恵まれている。

ところで、2030年までの達成を目指す17の世界共通目標（Sustainable Development Goals/持続可能な開発目標）の略称であるSDGsが次世代の学びにも強く期待されるようになった。貧困や飢餓、テロなどの国際紛争、ジェンダーや社会的格差、フードロス、海洋汚染、気候変動など世界で生じている様々な問題を背景に国連加盟193カ国が合意する共通目標となっている。熊本市の中学生にとっても主に社会科や理科、外国語、総合的学習、道徳、技術家庭科等を通して日常の課題と重ね合わせて学ぶことが求められている（来

表1 熊本市立北部中学校における「総合的な学習の時間」の全体計画

表1 令和2年度 総合的な学習の時間全体計画

(28) 熊本市立北部中学校

学校教育目標	
人とつながる 社会とつながる 未来とつながる ESD Well-being2020	
生徒の実態	総合的な学習の時間の目標
<ul style="list-style-type: none"> ・明るく素直な生徒が多い。他者とのコミュニケーションや自己表現、主体的な活動はやや苦手である。 ・自ら課題を見つけ、主体的に課題を解決していく経験が乏しく、探究心を持って積極的に取り組むことがやや苦手である。 ・自己表現することの苦手意識が高い。 ・学習面で課題のある生徒が数名いる。 	<p>探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質や能力を次の通り育成することを目指す。</p> <p>(1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習の良さを理解するようにする。</p> <p>(2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようになる。</p> <p>(3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさをいかしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。</p>
地域・保護者の願い	校区の小学校の総合的な学習の時間の主な取組み
<ul style="list-style-type: none"> ・学校では多くの友だちを作り、楽しく過ごしてほしいと願っている。 ・教育に対する関心は高く、学校への期待も大きい。 ・社会における規範意識や正しいマナーを身に付け、将来において役立つ「生きる力」の育成を願っている。 ・地域に対する関心を持つ生徒の育成を願っている。 	<p>【川上】 3年：ずっと住みたい わがまち川上、4年：住みよいまちってどんまち？ 5年：身近な自然について考えよう、6年：今、わたしたちにできること</p> <p>【西里】 3年：西里の自然調べ、4年：源流探検（井芹川の源流調べと観察） 5年：米作り、伝統文化を学ぼう（神楽） 6年：敬老会との交流、西里の歴史、文化調べ</p> <p>【北部東】 3年：もっと知りたい北部東、4年：だれにでもやさしい町づくり、5年：わたしたちの環境について考えよう、6年：さまざまな世界のことを知り、平和について考えよう</p>

北部中学校の総合的な学習の時間の目標	
<ul style="list-style-type: none"> ・他者と協同して課題を追究して解決したり、創り上げたりする活動を通して、学び方や考え方を身に付け、次代をたくましく生きる力を身に付ける。 ・自らを取り巻く環境や地域に目を向け、よりよい社会の実現を目指すことで、自己の生き方について考えることができる。 	

探究課題	知識・技能	思考力・判断力・表現力				学びに向かう人間性
		課題設定	情報収集	整理・分析	まとめ・表現	
1年 熊本市にある、身近なSDGsについて調べよう。	調べ学習や実生活を通して、身の回りにあるSDGsの視点を見つける	SDGsのゴールに向けて自分ができることは何か	SDGsの目標達成に向けて自分が実践できそうなことを調べる	集めた情報をもとに自分の考えを整理する	調べたこと、考えたことをまとめ、文字のデザインとして発信する	学習を振り返り、考えたことを実生活で実行する
2年 人はなぜはたらくのか？	良好なコミュニケーション力、マナー、職場での専門的なスキルを理解する	なぜ働くのか？私は……のためだと思う	ゲストティーチャーとの触れ合い（講話と実演）を通じた学び、他者との体験の交流	自分なりの生き方や進路を考え、学び感じたことを整理し、分析する。	学級・学年で発表する 自分の考えをポートフォリオとしてまとめる	学習を振り返り、学んだことを実生活で生かす
3年 これからの地域の在り方、自分の在り方	世界の課題に目を向け、活動している中身を知る	住み続けられる町にするために	映像・画像、数的データ、アンケート資料、聞き取り等複数の資料を収集する	複数の異なる考え方や意見を比較したり関連付けたりする	校区や地域の良さを分かりやすい方法でまとめ、学校・地域へ発信していく	学習を振り返り、学びの過程や成果を自己評価、相互評価する

北部SDGsの時間		
	1年	2年
前期	<ul style="list-style-type: none"> ・身の回りにあるSDGsの視点を見つける ・SDGsのゴールに向けて自分ができること ・自分の思いや考えを文字のデザインに乗せて発信する ・学びを実生活の中で実行する ・故郷熊本の良さに気づき、対外的にその良さを発信する 	<ul style="list-style-type: none"> ・校区の安全マップ作り 安全な自転車の乗り方の指導・災害と暮らし ・各自課題を設定し、自分で調べて、新聞を作成する ・国土緑化機構とSDGsの目標とを絡めた、探究活動 ・薬物乱用防止教室の事前学習とプレゼン作り ・心肺蘇生法を学び、他の生徒への復講活動 ・グループで考えたテーマに沿った、統計グラフの作成 ・運動の効果について考え、自分の生活習慣を整える ・服のチカラを通して、難民の生活を考える。
後期	<ul style="list-style-type: none"> ・安全マップを用いて、小学生へ安全意識を高める活動 ・各自課題を設定し、自分で調べて、新聞を作成するⅡ ・国土緑化機構とSDGsの目標とを絡めた、探究活動Ⅱ ・健康集会の発表から考えた探究活動 ・グループで考えたテーマに沿った、統計グラフの作成Ⅱ ・自分に合った運動メニュー作り ・熊本の中学生が提案するSDGs修学旅行 熊本版、鹿児島版、京都版 	<ul style="list-style-type: none"> ・卒業に向けて自分の進路を考える ・3年間を振り返り、社会に貢献できる自分の生き方を「卒業論文」にまとめる ・作成した「卒業論文」を全体へ発信する

熊本市立北部中学校 ホームページ QRコード

各学年総合

1年
総合



楽しいメッセージ+SDGs
文字に未来への思いを込めて



1年生では、明るい未来への思いをふくらませ、作品をつくり、**発信する** 活動を通して、社会や学んだことなど多様なことと、つながることを意識して学習活動に取り組んでいます。

学習の流れ

- ① SDGsについて知る
- ② SDGsの17項目の中から、興味のある分野を選ぶ
- ③ 思いを言葉で表現する
(どんな未来にしたいのか、そのために何ができるか)
- ④ 文字のデザイン
- ⑤ 発表原稿づくり
- ⑥ プレゼン






年度、供給の中学校の社会科の検定教科書では大きく扱われる予定)。観光資源が豊富な熊本への修学旅行で来訪する他県の中学校が熊本市に立ち寄った際、SDGsをリアルに学べたら、旅行の教育効果がさらにあがるのではないだろうか。経済、社会、環境の3つの側面を包括的に捉えたSDGsは、熊本市の資源と出会うことで一層臨場感が感じられるテーマになる(図1参照)。

一方で、課題も山積している。第一に熊本市の観光に関する訴求力が不明確で著しく不足している点だ。メディアへの露出度をさらに高め、資源を価値に換える発想とプロモーションが必要である。第二に「水の都」(市内)でなく「火の国」(阿蘇火山)のイメージが先行している。第三に、熊本城の復興のみがクローズアップされ、その陰に隠れ湧水や食事、方言、肥後野菜・スイカやトマト、戦国時代以後の歴史文化が見えづらい懸念がある。

北部中学校が位置する熊本市北区には、フードパルという食を通じた体験施設もあるものの全国的には知られていない。熊本はスイカや馬刺が旨いとは知られているが、若者のココロには刺さっていない。アートやスポーツ、着物を着た城下町散策などが楽しめそうなイメージが薄い。しかし、教育旅行的には、例えば一種のダーク・ツーリズムの訪問先としてハンセン病の施設菊池恵楓園(合志市)もあり、学びどころ大のエリアでもある。

SDGs教材は、「環境」「社会」「経済」の三つの主テーマにアプローチできる特色がある。学習者である修学旅行生自身が、これらの主テーマを熊本市エリアで見出すことのできる諸課題を具体的な訪問先や題材として照合でき、団体やグループでその場所を訪問することでSDGsに関わる諸課題を身近に引き寄せる旅

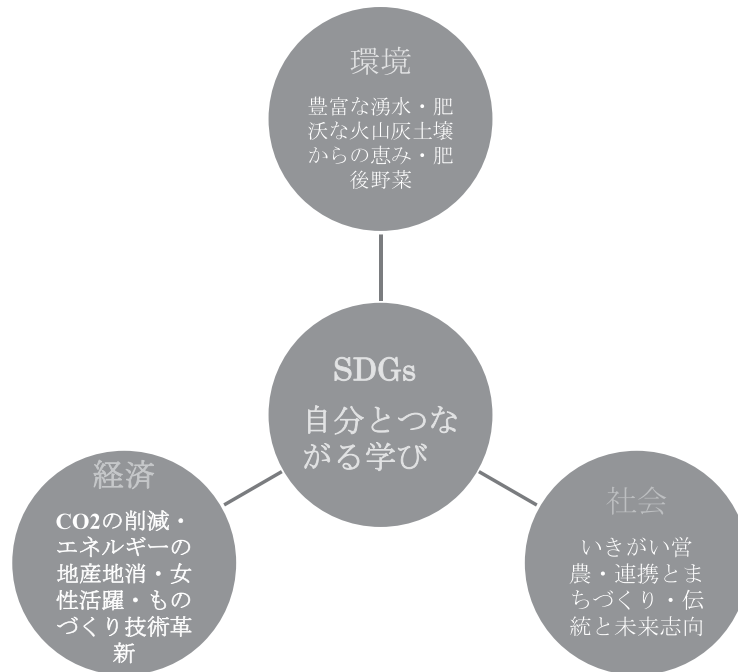


図1 本市北区をモデル地域にして環境・経済・社会の3分野をバランスよく思考する概念図（筆者原図）

体験が可能となる。17の目標のいくつかに関わる場所で中学生自身が、表出する社会問題や産業・経済・環境保全の存在などを目にして、多角的に思考する修学旅行が実現できるため、「熊本市SDGs学習地図」を北部中の生徒自身が社会科や理科、総合的学習を使い、調べ作図してみることも期待できる。

IV 地元中学生による修学旅行の誘客活動を通して得られる資質・能力

前述したように世界の多くの国々では、あらゆる分野で知識が重要な基盤を持つ「知識基盤社会」の時代を迎え、変化に耐えうる幅広い知識や柔軟で高度な思考力・判断力が求められている。近年では、これまでの「何を知っているか」を重視するコンテンツベースのカリキュラムから、「知ったことを使って何かを解決する」ことを重視するコンピテンシーベースのカリキュラムへの転換が教育界の大きな流れとなっている。そこにSDGsが具体的な目標として登場した。小中高校を貫く資質・能力の系統性も改訂された学習指導要領で明示され、同時にSDGsの要素（持続可能な社会の担い手としての資質能力）も重視されている。小学生時代の基礎的な学びの上に中学生らしい教科横断的で探究的な学習を通して多角的な思考力と探究的な態度を身に付けるよう期待されている。他県から来訪する熊本市への修学旅行をマネジメントできる機会は、貴重な学習経験を北部中生徒たちに、与えてくれることだろう。

例えば、北部中生徒が制作した「SDGs学習地図」を目にした中学生は、まず「知る」というステージに入る。そこではSDGs学習地図で得た「くまもとの環境のもと」を知ることができるだろう。一か所で複数の持続可能な開発目標について学べる箇所もあれば、そうでない場所もある。その中から、教員や仲間と相談しながら、興味ある事象を「調べる」ステージに進む。教科書やインターネット、図書館の図鑑や統計資料、熊本関連本などを使って事前学習を重ねていく。熊本市をケーススタディにしながら、SDGsに関わる諸課題を探究していく中で情報整理の機会がつけられる。SDGs学習地図（熊本市）から調べた事柄とインターネットで調べた内容を別の白地図に書き写したり、作表したり、吹き出しや図解を書き込んだりしながら、調べた結果を地図で「重ねる」といった作業を試みることで「包括的に物事を見る能力を身につける」こと

ができる。つまり、

SDGs in くまもと 修学旅行の最終的な教育目標は、中学生が、知る→調べる→重ねる 学びを通して、「持続可能な社会の担い手として、自分のテーマを見つけ、課題を深める」こと

が期待できるのである。

事実、北部中学校の第1学年のESDカレンダーを参照してみれば、総合の項目では、4月から次のような単元が並んでいる。

SDGsについて知ろう（4月）、身の回りのSDGs（5月）、教育キャンプのSDGs（6・7月）、【夏課題】熊本市・北部のSDGs調べ（8月）、熊本城周辺・北部地域のSDGs探し（9・10月）、熊本市の修学旅行コースを考えよう（11・12月）、熊本市SDGsコース発表会（1・2月）、SDGsまとめ（3月）と魅力的なテーマが並び、修学旅行との関連も重視されたカリキュラムに仕上がっている。

V 層（レイヤー）でつかむ熊本市の風土と修学旅行指導

熊本市への修学旅行でどのような学習内容が深められるだろうか。中学生に最低限理解してもらいたい内容として層（レイヤー）モデルで解説してみたい。

熊本市にみられる自然と文化の地質的・地形的な基盤には、阿蘇火砕流堆積物（溶結凝灰岩）と火山灰土壌が見出され、湧水や渓谷が至るところにある。石垣や住宅用の建材、渓谷観光、湧水と水路（井出）、庭づくりにも反映している。それらの特色は、九州中央部としての特性や気候、有明海を背景に、豊かな生活文化を育み、長い藩政時代の大藩としての雅な文化も培った。現在、それらの上に産業や経済、都市化と過疎の問題が表出している。

例えば、SDGsの開発目標15「陸の豊かさを守ろう」（Life on Land）に関係する生物多様性は市内にある湖沼（江津湖）や有明海、近隣にある阿蘇草原エリアで生育する、水前寺もやしや海苔、ムツゴロウ、りんどうなどの固有種がどうしてそこでしか見られないのか、といった疑問に気づかせることができる。熊本市内にある江津湖や八景水谷（湧水池）は、阿蘇からの伏流水が湧き出た場所であり、地下に巨大な水壘があることも想像させる。ミネラルを含んだ夏でも冷たい水を享受できる市民の幸せが他県民に十分には伝わっていない。

中学生にとって各層を貫いてさまざまな要素が産業・経済・環境などのテーマで地表に表出している姿をSDGsの視点から具体的に見学したり、探究したりする学びが「修学旅行でSDGs in くまもと」なのである。

他県の中学生、例えば関西の中学生にとって、熊本市は立派なお城と美しい街、魅力ある食べ物、伝統工芸品、くまもんへの興味も強い特別な目的地（ディステーション）である。中学生の興味関心が向けられている場所だからこそ、教員がお膳立てして事前（旅まえ）・事中（旅なか）・事後（旅あと）の学習を進めていくスタイルから、部分的で良いので生徒主体の地域調査や旅行計画をいかに織りこんでいけるかがポイントとなるだろう。事後学習の在り方は別記するが、事前や事中（旅行時）における3つの学習のプロセスに軸をおいて修学旅行のタイプ分けを以下に試みてみたい。

VI 3つの学習プロセス

【見学解説型】 この学習は、教員や現地のガイド（バスガイドやハイヤー運転手等）の案内に従いながら、見学したり解説を聞いたり、生徒はメモや写真をとるよう指導されたり、比較的受け身で学んでいくことに主眼がおかれた学び。具体的には団体バスで一か所を見学する場面やグループ分散学習でハイヤー利用で巡る場面のいずれでも見られる周遊ツアーに近い形である。案内者からの解説がメインとなり、生徒の活動

は事象の理解が主となる。

しかし、事前学習で生徒が強い問題意識を抱いて見学する場合とそうでない場合の見学時の解説の理解度は異なるだろう。具体的な「問い」を持って見学する場合、たとえ教員やガイドによる一方的な解説であっても生徒の好奇心や課題解決の意識はある程度満足できる。SDGs学習地図を事前に読み解き、主体的に課題を明確にできた生徒は見学の際、聞く姿勢が異なる。さらに、予め抱いた問いを書き出し教員やガイド、ハイヤー運転手などにQ & A形式で質問できるようになれば、見学解説型から課題探究型へと移行できるようになるだろう。例えば、SDGsの開発目標11「住み続けられるまちづくりを」(Sustainable Cities and Communities)のテーマに関わって住環境の大切さを知るため、熊本市にある水前寺成趣園という細川による藩政時代に作庭された庭園を見学し、生徒から「富士山や琵琶湖に見立てた築山や池」はどのように維持しているのですか?と質問ができるようになれば庭の文化探究という学びができる。

【情報整理型】 この学習は、教員やガイドによる案内や誘導はありつつも、生徒が訪問先で調べた情報を図表や地図に落として作成したり、現地で簡単なインタビュー調査を主体的に取り組んだりする学びを想定している。例えば、SDGsの開発目標の16「平和と公正をすべての人に」(Peace, Justice and Strong Institutions)をつかむため、中学生がハイヤー運転手に「市内には太平洋戦争の時代、どんな戦争があったのですか?」と質問した場面を想定すれば、1945年7月1日の熊本市への焼夷弾攻撃の説明を受けられたら学びがいにつながる。

【課題探究型】 この学習は、修学旅行期間だけで探究するのではなく、事前の準備学習や事後の作品づくりなどを通し、やや長期にわたり課題を探究する「省察(リフレクション)する」能力の育成につながる学び。例えば、八景水谷で知り得た湧水の豊富さに興味を持った中学生が、熊本市の市民生活で具体的にどのようなメリットを湧水から感じているか、その由来や産業活用も研究したいという学びができる。SDGsの開発目標9「産業と技術革新の基盤をつくろう」(Industry, Innovation and Infrastructure)に関係して熊本地震復興事業として進められている熊本城再建、JR豊肥線や阿蘇大橋の開通工事を題材に見学したいと考えた中学生にとって、いかに熊本観光や産業復興に向けてインフラ整備が大事であるを知ることができる。場合によっては観察・見学に始まり、課題設定を行い、仮説を立てて現地や文献で調べて実証するという研究的なアプローチが可能となるなど学び方も獲得できるようになるかもしれない。

これら3つの学習プロセスは、人間と自然との関係や位置や場所の特性、地域の変容、地理的・歴史的な手法で土地利用や文化財を考えることのできる汎用的なコンピテンシーを身に付けるきっかけともなるだろう。

Ⅶ 修学旅行のまとめとルーブリック評価

団体旅行や分散学習の機会を通して、熊本の風土に対してSDGsの視点から課題を設定し、情報を収集整理し、考察を加えていく修学旅行は、現代の地球社会が抱えている17の持続可能な達成目標をコンパクトに実感できる機会として期待されている。ただ、熊本県は面積も広く、熊本市域も小さくない。修学旅行生の宿泊場所によってはSDGsの課題を万遍なくカバーはできない。そのため、SDGs学習地図や観光情報がセットになった教材資料を活用し、実際には見学できない箇所も類推できるような学びが期待される。北部中生徒がそうしたニーズも汲み取って他県の中学生に提案できれば達成感がもたらされるだろう。

簡単なルーブリック評価も修学旅行学習で可能だ。修学旅行を通してまとめのレポートを作成させた場合、以下のような観点で達成度を評価できる(表2)。

表2 SDGs in くまもと修学旅行のまとめとルーブリック評価（簡易版）

達成度	A	B	C
①事前学習で見出した「問い」の解決が果たしているか	ノートに書いた問いに対する回答の記録ができています	ノートに書いた問いにある程度答えられている	ノートに書いた問いに応えられていない
②SDGs学習地図を活用し地図化や表への情報整理ができていますか	SDGs学習地図の読取りと地図化、表への整理ができています	SDGs学習地図の読取りと地図化、表への整理がある程度はできています	SDGs学習地図の読取りと地図化、表への整理ができていない
③誤字脱字はないか？書き方は適切か？	誤字脱字がなく、丁寧な言葉遣いで書いている	誤字脱字はほとんどない	誤字脱字があり、書き方も雑である

VIII おわりに：旅行後へのつながり

修学旅行やその他の宿泊を介した体験は、生徒にとって「特別な体験」ととどまり、旅行後の日常世界に戻った際、獲得した見方や考え方、知識が同様の課題に接した際に応用・転移せず単に「旅の思い出」で終了してしまうきらいがあった。これを避ける上でも熊本で学んだ内容をコンテンツの上からも応用的汎用的な生きた知識として定着することが求められる。

例えば、ハンセン病の病院をつくったハンナ・リデル女史の功績、土木事業にも貢献した加藤清正や布田保之助の働き、俳人・中村汀女の功績、熊本電鉄で走っている「青がえる」車両（東急の路面電車）がもたらす観光効果、フードパルクまもとの体験コーナー、坪井川や白川の洪水被害の予想などの問題に触れた県外の中学生が、自県に戻った際、同様の問題が自県にはないのか、と関心を持ち続けるためにも教員は「同じような問題は、〇〇県にはないのか？」と示唆する言葉がけをしてあげることが大事な事後指導になる。

有明海に面した熊本市河内町や玉名市、宇土市などの沿岸で養殖されている海苔も「くまもとの持続可能な水産業」として扱うだけでなく、玉名生まれの海苔養殖の父・早野義章の功績を調べ、自分の県に戻った折に振り返る上で同様の先人の働きはないかが見出せる。さらに、美味しいくまもとのスイカ栽培は、水と日光が大事。そこに美味しさを加味する何らかの栽培の工夫が見てとれるはずである。これらの発見は、自県の農産物への見方にも参考になる。城下町の新町エリアで進んでいる古い商家や古民家のリノベーションも、中心市街地活性化のモデルになる。1953年白川大水害の記憶が残る白川や坪井川で見学できる河川改修は、2017年に福岡県朝倉市で起きた大雨による災害（37人死亡）の防止とも共通している。2016年に発生した熊本地震は、最大震度7の揺れが二回も起こり、都市直下型の地震災害として学びどころが多い。川尻刃物や肥後象がん、おばけの金太、肥後手まりなどの伝統工芸品は、長い藩政時代に育まれた文化である。藤崎八幡宮秋の例大祭は、秀吉の朝鮮出兵とも関連し国際理解教材にもなる。太平燕は中国との関係を類推させ、いきなりだんごは「がまだず」熊本県民の姿勢を示している。ちょっとユニークな観光対象として、松本喜三郎の「生人形」もある。

以上のように、豊富な観光資源を学習材としていかに整理し、SDGsと関連づけていけるか教員による構想力が求められる。修学旅行はそれ自体、一回きりの思い出深い記憶になり、生徒の生きる力を育む経験知となるが、旅行後の日常の世界を讀取る鏡としても旅行経験を生かせるようにつながりを意識させたいものである。

謝辞

本稿作成にあたっては、熊本市立北部中学校上野正直校長並びに熊本市教育委員会学校教育部長塩津昭弘両氏に大変お世話になった。記して、感謝を申し上げたい。

【参考文献】

- 五島敦子・関口知子編著（2010）『未来をつくる教育ESD—持続可能な多文化社会をめざして』明石書店、224ページ。
- 佐藤真久・阿部治編著（2012）『持続可能な開発のための教育ESD入門』筑波書房、255ページ。
- 寺本潔（2001）『総合的な学習で町づくり』明治図書、152ページ。
- 寺本潔・澤達大編著（2016）『観光教育への招待—社会科から地域人材育成まで』ミネルヴァ書房、168ページ。
- 寺本潔（2017）『教師のための地図活—地図帳・地球儀・防災・観光の活かし方』帝国書院、78ページ。
- 寺本潔監修（2020）『ポプラディア+日本の地理』（全7巻）ポプラ社、各巻278ページ。
- 寺本潔（2020）「教育旅行と観光教育—相互補完の関係を考える」『教育旅行』第68巻第7号、日本修学旅行協会、pp. 23～25.
- トランスファー 21編著 由井義通・ト部匡司監訳（2012）『ESD コンピテンシー—学校の質的向上と形成能力の育成のための指導指針』明石書店、169ページ。